# 妹部をつくろう

本田みらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹部をつくろう

【Ｎコード】
Ｎ９４４０Ｙ

【作者名】
本田みらい

【あらすじ】
妹が好きで好きでたまらない男、美女木正邦には悩みがある。それは、妹がいないことだ。あらゆる努力をしても妹が出来なかった彼は、『妹部』をつくり、妹的存在を集めようとするが……。

気持ち悪がられるかもしれないが、先に言っておく。
俺――美女木正邦（びじょぎまさくに）は、妹が好きだ。
俺は妹のことになると我を忘れて熱く語ってしまう、そんな男だ。まあ少し妹について語ってやろう。
妹は毎朝、六時半に俺の部屋をノックして、「おにいちゃん、朝だよ～」と甲高い声を弾ませる。
そして俺は、「もう起きてるよ。おはよう」とか反応を返すわけだ。
妹も、「あーおはよう。もうご飯できてるよ」なんて定型句を言って、他愛のないテレビ番組を見ながら、他愛ない会話を交わし、朝ごはんだ。妹は、自ら作った味噌汁とご飯をよそってくれる。
俺は、「そんなに食べれないよ」なんて妹を困らせるが、「たくさん食べてね」なんて言われると、無理でも食べなきゃいけないが、あいにく俺の妹はそんなことは言わず、御飯の量を減らしてくれる。
我が妹ながら俺のことをよく分かっていると感心する。
俺が、「だいぶうまくなったな」なんてホメると、少し顔を赤らめながら、「そ、そうかな？」なんで恥じらって、「次はもっと美味しい物作れるようになるね」などと、妹は可愛げのある向上心を示す。
そして、一緒に登校。俺達が住んでる町、日本で一番ダサい名前の市、ときわ市紫峰平地区は再開発地区で移り住んできた俺達新住民と、もとから住んでいた旧住民の確執は絶えないが、そんなことをものともしないぐらい仲の良い兄妹として、周囲からも認知されている。そのあたたかい目で見守られながら、二年前に造成された近代的なニュータウンを二分ほど歩き、電車で三駅先の高校へ通う。再開発中に路線ができたので、駅間距離は都心と遜色ない。
その途中で、四月になり散ってしまった桜の木を見ながら俺が「

この町に越してきてから、もう二年か……」などと哀愁ただようセリフを口にすると、妹は、「そうだね、でも、あたしは昔のほうがいいな。おにいちゃんといっぱい遊べたし」なんて凄く嬉しいセリフを言ってくれる。そういう気配りもできるやさしい子だ。

電車の中でも妹は、昨日あった面白い出来事などを事細かく話してくれる。

高校の校門付近でも、同級生や妹の同級生などから、「いつもながら仲いいね」なんて言われたりする。

校舎の入り口で、「バイバイお兄ちゃん、また放課後ね？」なんて言い残して、妹は自分の教室へ向かう。もちろん放課後も、俺の教室までやってきてくれ、「おにいちゃん、帰ろう？」と言って自然と帰る。

家に帰ってからも、料理を作ってくれたり（時に失敗する）、「お兄ちゃん、勉強教えて！」なんて擦り寄ってきたりと、なんとも愛らしい。

毎日、こんな感じで妹は俺の心を癒してくれる。

俺の心の支えであり、俺の誇り。

というのが、俺の理想だ。

しかし、俺には妹がいない。

妹がいないのだ。血縁上も戸籍上にも。

何故こんなにも妹を愛しているのに、妹がいないのかについて考察したことがある。

その中で一番問題だといつも結論づけるのは、うちの親父が、仕事上なかなか家に帰って来ず、再婚できないでいること。

だが最近、それが一番の問題ではないことに気付いた。そう俺は、妹を手に入れようという努力を怠っていたのだ。勿論二次元に逃げたわけではない。

俺は、現実の妹がほしいのだ。そして俺は気付いた。

妹じゃなくていい。義妹でいいから欲しい、そう、妹的存在、だ。
俺のことを『お兄ちゃん』と呼んでくれる存在。
十年前は……、いややめておこう。
今、やるべき事は過去を振り返ることじゃない。

それに気付いてからというもの、俺は動くことに決めた。
未だ見ぬ妹のために。
何をすればいいかわからないときは、インターネットを頼るしかない。情報の海には、様々なことが載っているからだ。
そこで俺は、妹喫茶なるものがあるらしいという情報を偶然発見した。東京の秋葉原、大阪の日本橋、名古屋の大須、福岡の北天神など全国規模の妹市場があるようだ。
し、知らなかった……。これが、情報の力というものか……。
メイド喫茶というものがあるということは前々から知っていたが、妹喫茶……。
行くしか無いだろ。妹喫茶だぞ？
俺の中の妄想では、清楚系・ツンデレ系・ヤンデレ系など、選り取り緑の妹が複数人いて、お茶をゆっくり飲んで楽しむ、そんな喫茶だと確定している。現実を加味してみると多少ハズレな妹がいるとしても、大半がなかなかのクオリティを有しているだろう。期待大だな。
俺は関東在住なので、秋葉原へ行くことに決めた。妹喫茶発祥の地ということで、大量の妹喫茶が検索に引っかかる。店によっては、ツンデレデーなどを設け、ツンデレに接客するらしいのだが、生憎俺はツンデレとやらには興味がないので、一番オーソドックスそうな店に行くことにした。店名が『お兄ちゃんと……』なんて、運命を感じるな……。特になんにもないけど。
翌日の朝、俺はＩＣ定期に十分現金がチャージされているか確認し、理想郷・秋葉原を目指した。仮初でもいい、妹ができれば。電車の中では、ずっとそんなことを考えていた。

秋葉原までは、四十分ぐらいで到着。メイド服の人などを完全に無視して、一路その店を目指す。貴様のような成人メイドになど興味ない！

その店が、雑居ビルの四階という怪しい場所に存在したことは、かなりの不安感を煽っていたが、千円以上かけてきたんだ、もう後戻りはできない。

妹で商売しているということだから理想ではないにしろ、ある程度クオリティの高い妹がいるだろう。それでこそ商売というもの。

妹ができるのならば、資本主義だろうが金満主義だろうが、なんだっていい。

俺は、少し緊張した面持ちで入店、いや、帰宅した。開店直後に来たので、中で準備をしているんだろう。忙しそうな妹に接客しろとはさすがの俺でも言えない。

「お帰りなさい、お兄ちゃん。好きな席に座ってね」

俺の妹たちは、奥のほうから声を出すのがやっとのようだった。仕方ないので俺は席に着き、メニューを見た。

『お兄ちゃんのことなんて全然好きじゃないんだからね』という名前のソフトドリンク（メロンソーダ）、『お兄ちゃん大好きオムレツ』など、値段も通常のレストランに比べかなり高めだったが、これで妹気分が味わえるのであればオールオッケー、モウマンタイだ。

開店直後に来たからか客は殆どいなかったが、俺にとっては好都合だった。見ず知らずのおっさん達に妹を渡してたまるか。

俺は、『お兄ちゃん大好きオムレツ』を注文するべく、ベルを鳴らした。そう、ここまではすべて許容範囲内だった。

奥から現れた妹――いや、女が俺の幻想をぶち壊した。その女は確かに可愛らしい顔をしているが、身長の高さや顔の老け具合、メイクの濃さなどから明らかに、大学生だと見て取れた。俺の目は節穴じゃねえ。

こんな女が、「お兄ちゃん」なんて取り繕っても、俺の中にある

『妹』の定義を満たせん。まあ、俺の理想の妹などこんなところにいないとは分かっていたが、な。
俺は、心のなかに沸々と湧き上がる怒りをこらえながら注文し、最後に年齢を訊いてみた。
女に年齢を訊くなど、常識に悖る行為であることはわかってはいたが、こうでもしない限り俺の怒りは収まらん。
「貴様、今何歳だ？」
「えー、やだなぁ十六歳だよ」
その女は、悪びれる素振りもなく普通に答えた。
……んまあ、客商売だし嘘をつくことは最初っから分かっていた。
二十歳ぐらいに見えるけど、十六歳ねえ……。
十六？
俺も十六歳なんだよ！
なんだよ、同級生の妹って！
確かに俺は老け顔で、二十代に見えないこともないと自覚している。それどころか、俺は十代男子に圧倒的人気のロボットアニメ『回転戦士・センバーン』に出てくる鋳込鋳造というキャラにそっくりなのだ。自分でも、そのアニメを見てそう思ってしまったほどだ。俺はオタクじゃないが。
話の途中で主人公一行を逃がしながら華麗に最期を迎えるらしく、「カッコイイおにいちゃん」というよりも、「男らしいアニキ」というキャッチコピーが似合う出で立ち。そんなことで、妹になってくれる子がいるのならなら救いようがあるが、生憎女の子にセンバーンは人気がないらしい。
恐らく、この喫茶店の接客マニュアルには、年下っぽく答えるように書いてあるのだろう。それはわかる。だが、だが……。
俺は怒りを通り越し、絶望すら感じていた俺はその妹（っぽく振舞ってる接客業の人）に何も言えなかった。
その後は、二十歳ぐらいの永遠の十六歳に、ケチャップで『まさくにおにいちゃん』と書かれたオムレツを食べさせてもらったりし

たが、既に醒めてしまった俺としては、むず痒く、居た堪れない状況だった。レジでもらったポイントカードを破り捨ててやろうかとも思ったが、妹役の人の商売スマイルに負け、財布にいれて店をでた。

なんだよチクショー。秋葉原は俺を裏切った。もう、秋葉原に行っても京浜東北線か中央線にしか乗ってやらん！！　妹のことなんて、これっぽっちもわかっちゃいない。

俺は、帰り際に買った妹モノギャルゲのパッケ絵を睨みながら、あの店には二度といかないと誓った。

それから俺は、悶々としながらも考えた。

どうしたら、俺には妹ができるかを。あんな愚にもつかぬ偽物ではない、最高の妹が。

「全然意味分かんないんだけど、要するにジョギーは、妹キャラが好きなのね？」

昼休みに教室で俺が有意義な思慮に耽っていると、隣の席に座っている女――川口青海（かわぐちおうみ）俺の妄想をぶった斬りやがった。一年の頃からさんざん言ってきたのに、コイツはなんにも分かっちゃいない。

青海はセミロングヘアで、顔も芸能人の誰かに似ていると言われるぐらい（興味ないので誰かは忘れたが）容姿はなかなかとの評判だ。この町――ときわ市に古くから住んでいる旧住民のなかでも旧来迎寺町の町長の娘という特権階級で、東京ドーム何個分かあるぐらいの土地にそびえ立つ家に住んでいる。青海の親がときわ市再開発事業にだいぶ関与したらしく、三代ぐらい遊んで暮らせる金を持っているらしい。

入学したばかりの時から何故か話しかけてくるし、俺のあだ名を勝手に決めたりしていたが、俺は妹的要素の欠片もないこの女――青海に全く興味がない。

そもそも、美女木正邦という名前から、ジョギーというあだ名に決めるなんてセンスが無いに決まってる。
クラス内でもそこそこ人気があるようだが、妹の事にしか眼中に無い俺には関係ない。チッ、俺の思考回路に異物を入れやがって。
「全く、何回説明すればいいんだ？　俺は、妹キャラじゃなくって、『妹』そのものが好きだって」
「だからって言ってもさー、見ず知らずの先輩を『おにいちゃん』なんて呼ぶ女の子なんて、どこ探しても絶対いないよ？」
「そんなことは分かっている。俺が、そんな軽薄な考えのもと行動していると思っていたのか？　俺は待っていたんだ、高校二年生になって、『後輩』が入ってくるこの時をッ！」
伊達に、春休みの中幾度もなく考察を重ねたわけではない。俺には名案がある。
「そんなにいい案があるなら、言ってみなさいな。絶対ボツになると思うから」
青海のやつ、俺が愚昧な考察しかできてないと思ってやがるな。
「ふふふふふっ、言っていいのか？　ふっ、ならば言ってやろう。それは、『妹部』を創る事だ！！」
「……」
青海は、言い放った俺から目を逸らした。まあ、無理もない。俺の崇高な考えを、この愚昧な女が理解できないでいるのはある意味当然か。
「ホント、ジョギーは頭いいのにバカだよね！？　『妹部』？　ハァ？　なにする部活よ？」
呆れた顔をしてこっちを見ている。仕方ない、補足説明してやるか。
「『妹部』が何をするか分からないのか？　野球部は野球を、バスケ部はバスケを、陸上部は陸上をするんだぞ？　妹部は妹をするに決まっているじゃないか。このために俺は一年待ったんだ」
「……妹をするって何すんのよ？　って、まあそれはいいとして、

そんなのに許可が降りるわけ無いでしょ？」
「甘いな。俺は、この妹部創設のための仕込みは既に終了している。とある教師の弱みを握ることでな。フハハハハ」
「……ウチの教員は、こんな奴に弱みを握られるほどバカだったの……」
頭抱えて、机に肘をつきやがった。俺の案のどこに理論的破綻があるというのだ。
「ということで、お前は我が『妹部』のマネージャーになることになっている。よろしく頼むぞ？」
「そんな事まで勝手に決められてるの？　……っていうか、部員揃うの？　大体、ウチの学校は五人揃わないと部活として認められないんだよ？　アンタ以外の四人なんて見つかるわけないじゃない。妹部とか、訳わからない部活に入ろうという女の子なんていないわよ？」
手を振りながらオーバーに否定してくる青海。有能な部下だと思っていたのだがな……。
「それを用意してくるのがキミの使命だと言っただろう？」
「何それ？　そんなの付き合いきれるわけ無いでしょ？」
「確かに、部活を作るというのは、最近流行りだし、ベタかも知れん。しかし、それ以外に方法が思いつかんのだ」
「何がベタなのか分かんないけど、どうにかしてこの意味不明な部活創設を防がないと……」
「それじゃあ、貴様の妹を連れてこい、尤も、いればの話だがな」
青海に妹がいるかどうかは知らんが、代替案を出しやがれ。
「わたしの妹をどうして、アンタに会わせないといけないのよ？」
「何っ？　妹がいるのか……。俺なら、お前の妹を大事にしていく自信がある。多少老けてはいるが、成績優秀な俺に任せろ、いや、任せてください」
一年以上居ながら、どうして気づかなかったんだ、俺。深々と頭を下げて青海を見ると、彼女はムンクのような叫びを放った。

「絶対イヤー！」
「お義姉ちゃん！」
「勝手にお義姉ちゃんって呼ぶなー！　ってか、わたしの妹まだ小学生だし……。……わかった、わかったわ。部活作って、妹っぽい子を紹介すればいいんでしょ！？」
　青海の口ぶりからして、明らかにやけくそっぽいな。目も逸らしているし。
「本当だな？」
　俺は、猜疑心を強めに念を押した。
「え、ええ、中学の後輩にアンタの言う、『義妹』の条件に合致する子がいたわ。その子、うちの高校入ったみたいだし」
　コイツから建設的意見が出るとは、なかなかやるではないか。
　しかし俺は、妹だったら何でもいいようなミーハーじゃない。基準に満たない場合は、即座に却下すると決めている。まあしかし、話ぐらいは聞いてやろう。青海の情報をまるっきり信じたわけではないからな、俺は。
　青海は、ボールペンを器用に回しながら「えーっとねー」なんていいつつ、思い出している。早く思い出しやがれ！　すごい気になるだろうが。
「うん、すごく可愛らしい子だよ。性格は、ちょっと引っ込み思案だけど、気配りもできるし、料理もできるわよ。二年半前の再開発最初期に引っ越してきてたから、一年ちょっとしか付き合いないけど」
「ほ、ほう。貴様の後輩にしては中々だな。だが、まだ判断材料が足りない！　写真かなんかないのか？」
「うん、あーちょっと待ってね」
　青海は、そう言うと鞄からケータイを取り出した。最近出たばかりのタッチパネル式のやつだ。
　金持ちのブルジョア層め、こっちは四年前に買ったケータイを未だに使っているというのに、半年周期で機種変しやがって。

まあ、この市で六家しかない大地主の娘だからしかたない……、にしても、買ったばかりだからか操作が手馴れてないように見える。機種変なんてする必要ないのにするからだなどと、未練がましく金持ち批判を心のなかで行っていると、青海がついに妹（仮）の写真を見つけたようだ。

「あったあった、コレね」

青海は俺の方にケータイを向けた。画面を覗いてみると、バスケ部らしき部活の集合写真のようで、男子と女子が十人ずつぐらい写っている。機種変しても、画像データはメモリーに入っているから引き継がれるのか。

「で、どの子だ？」

俺は喜び勇んで訊いた。

「右上の子よ。拡大してみて」

俺は、青海のケータイを取り上げると、テレビで見たように、指をタッチスクリーン上でスライドさせ拡大させた。技術の進歩は素晴らしいな。

「この子か？」

そう訊くと、青海は頷いた。うーん。写真の解像度が悪いのか、撮影の方法が悪いのか、少しぼやけている。しかし俺の目には、ショートボブの子がはっきりと分かった。背も小さいし、何よりも笑顔が可愛い。外観的な基準は満たしているな。

「なるほどな。ひとまずこの子で妥協してやろう」

この子に「おにいちゃん」と呼ばれるのか……。さすがに、一緒に登校なんかはできないにしても、青海の情報だと料理上手らしいし、一緒にご飯食べたりして、そこで「ご飯粒ついてるよおにいちゃん」なんて言わたりして……胸が熱くなるな。

「フハハハハハ」

高笑いが止まらん。

「ハイ、ハイ、妄想終わりー。じゃあ、放課後この教室に来るようにメールしとくから」

青海は、俺の手にあったケータイを奪い返すと、ケータイを操作し始めた。
青海の話をまとめると、引っ込み思案でいじられキャラの料理上手、か。ど真ん中ストライクな妹ではないが、妹ができるという事象に俺の心は満たされていた。彼女が理想の妹になるべく指導してもいいだろう。幸先好調だな。
誤解にならないように説明するが、俺は妹にイタズラやちょっかいを出したいわけではない。
妹とのHシーンなど言語道断だ。確かに俺は、妹モノのエロゲをプレイしたことがある。
だが、唐突にHシーンが出てきて、俺はブチ切れ、そのディスクを割って燃えないゴミに出した。それから、エロゲを買っていない。
俺は、ただ、心の支えが欲しいだけであって、安易に近親相姦したがる尻軽女を妹にしたいとは毛頭思わない。……ギャルゲは買っているが。
ああ放課後が待ちどうしい。授業が始まったが、五六限の授業なぞ耳に入るはずがない。ついに、俺にも妹ができる。苦節十六年、俺は授業がこんなに長ったらしいと感じたことは始めてだ。数学教師の大橋も焦らしやがって。虚数などどうでもいい、虚妹……。ああ俺は何を考えているんだ。俺の体力を消耗させようという作戦か？　その手には乗らん。無だ。無の世界を想像するのだ。
混乱してきた頭の中を一旦真っ白にして、青海からの情報をまとめてみることにした。
引っ込み思案で、気配りもできる料理上手な妹の……。
はっ、しまった、俺としたことが妹（仮）の名前を聞いていないっ。
妹に、「おにいちゃん」と呼ばれるのに気を取られて、妹の呼び方を考えるのを怠っていた。
青海に訊こうとしたが、一応優等生として授業料免除されている身としては、授業中に私語をして教師の心象が悪くなるのは困る。

あああああ。俺は、どうすればいいんだ。「妹」なんて呼べないだろ。結局俺は頭を抱えてしまった。
滅多に悩まない俺が悩んでいる姿を見て、クラスがざわざわしだした。
「あの、美女木が頭抱えているぞ」「確かにこの問題、めちゃくちゃ難しい」
いや、そういう事じゃない。落ち着いた状況なら、どんな問題でも解いてやるよ。
数学の大橋も大橋だ、俺は授業なんて聞いてもいないのに、
「そんなに悩んでいるんなら、美女木。お前答えてみろ」
だと？　そんな事やっている場合ではないのだ、俺は。
俺は、大橋を未だかつて無い程の剣幕で睨みつけた。正常な思考を失っている今、答えられる問題などない。
「じゃ、じゃあ、となりの川口、答えてみろ」
俺の剣幕に押されたのか、青海に回答権が回ったらしい。青海、そんな問題の回答より、俺の問題を解決してくれ。
青海が当てられてから、俺は最大限青海を凝視した。アイコンタクトで伝わってくれ。
俺の祈りが青海に通じたのか、席を立ち、黒板に向かう途中、俺に向かって、
「みき……」
とだけ呟いた。そ、そうか。ミキちゃんか……。いや、聞こえなかっただけで、ミキコかもしれないし、他の文字列も考えられる。俺は、このヒントだけで妹（仮）の呼び方を考えなきゃいけないのか……。ちゃんをつけるか否か……、中々ハードルが高い。しかし、それでこそ妹を手に入れる努力というものだ。
俺は、考えた挙句オーソドックスに『ミキ』と呼ぶことに決めた。ファーストコンタクトからそんなに馴れ馴れしく呼んでいいのかとも考えたが、引っ込み思案という情報から、押しに弱いと推察した。
初めは名前を呼ばず会話をして決めてもいい。保険付の一手だ。

そうと決まれば、放課後まで脳内妄想大会の開催だ。
「美女木がニヤニヤしだした」「ついに解けたのか」
などとクラスメイト共がほざいているが、俺の思考の邪魔にはならない。
ミキが頬についたご飯粒を、『お弁当』と呼ぶか否かという重要な案件を考察していると、ついに待ちに待った放課後がやってきた。

☆

西日が差し込む閑散とした教室に、俺はひとり佇んでいた。青海は、俺がミキのフルネームを問いただす前に、
「一の七まで呼びにいくから、ちょっと待っててー」
と言ったきり、もう二十分も帰ってきていない。もう五時だぞ？
電話しても出ないし、何をやっているんだ全く。
二年三組のあるB校舎二階から、一年七組のA校舎までは、ゆっくり歩いても十分ぐらいで往復できるはずだ。遅い、遅すぎる。
まさか、俺に妹ができたら困る組織が、ミキと青海を襲った？
いや、そんな組織ないだろ。イカンな、つい妹の事を気にしてしまうあまり思考が暴発してしまっている。冷静にならなければ。
それから、十分ぐらい待ったところで、青海はやってきた。
「ゴメンゴメン。ちょっと、色々あってねー」
左手を顔に持っていき、ゴメンのポーズ。普段だったら青海に怒りをぶちまけていただろうが、貴様の功績に免じて許してやろう。
「で、例の件はどうなった？」
俺は、軍隊の司令官のように手を組んで顔をのせ、神妙な面持ちで訊く。青海は、自分の席に腰掛けながら、教室のドアを指さした。
「そこに隠れてるよ」
よく見れば、恥ずかしそうにしながらこっちを見ている子がいるではないか。高校に入るまでに髪を切ったのか、ショートになっていたが間違いなく写真の子だ。

全身（半分隠れているが）見渡すと、身長も百五十センチぐらい、出るところが全く出ていない理想的な妹体型。わずかに色褪せてはいるが一年である証の真っ赤なスカーフに、少し長めのスカートという我が校のブレザーがとてもよく似合っている。どの子もスカートの丈が短い昨今、若干長いのが逆に好感が持てる。まだ判断は下せないが、かなりの妹だ。これは、青海にグッジョブと言わざるをえない。

情報通り恥ずかしがり屋さんなのか、中々教室に入ってこようとしないでモジモジしている。

ここはどうするべきだ？　俺は、妹に対する知識と熱い情熱は持っていても、トライアンドエラーをやっていないので、こういう時の対応策が全く思いつかない。

「は、入っておいで」

俺は裏返りそうな声を必死で押さえ、妹（仮）に向かって優しく問いかけた。うーん、自然体というものは難しい。

ミキはというと、さらに顔を赤らめながらキョロキョロしている。遠目からだからよくわからないが、その小動物のような動き、ものすごく可愛いではないか。俺が上がりすぎているテンションを抑えていると、痺れを切らした青海は、ミキにの後ろに回りこんで肩を両手で叩いた。

「大丈夫よ。見た目は、歴戦の勇士みたいだけど、取って食ったりしないから」

誰が歴戦の勇士じゃコラァ、鋳込鋳造なめんな！　と、興奮してしまったがミキを怖がらせるのは不味い。黙っておこう。

「ハ、ハイ……」

恐る恐る教室に入ってくるミキ。しまった、怖がらせてしまったか？　初対面としては、これ以上に気まずいことはない。よし、こっからは明るく振舞って安心させよう。

「大丈夫だよ、さあここに座って」

俺は前の机から椅子を抱え、俺の机の前に置いた。

「あっ、すみません」
照れながら座る俺の妹（仮）。席に座るとミキは縮こまってしまった。縮こまった姿も可愛い。青海も、ミキの後ろに立ち俺をサポートしてくれる。
役者が揃ったところで、ようやく俺は自分の計画が浅はかだったことに気付いた。
『何の話をすればいいのか』、全く思いつかないのだ。
さすがに、妹になってくれとは言えないし……。俺が鬱々と考えていると、ミキが気まずそうに口を開いた。
「あのぅ。ボクは、どうすればいいんですか？」
ミキの一言に、俺は驚きの色を隠せない。
ボ、ボクっ娘だと？
こんなに可愛いソプラノヴォイスを発しながら、ボクっ娘……。まさに今俺は、俺の妹観を完全に否定されてしまった。妹の一人称といえば、「あたし」若しくは「わたし」に決まっているのだ！百歩譲っても、「あたい」だろ？　と、ついさっきまで思っていた。しかし今、ボクっ娘に直面すると、俺が間違っていたような気もしないでもない。
そ、そういう類のトラップなのか？　青海を見やると、うっすらであるがニヤニヤしている。何かあるのか？
そんな青海からの束縛を外すため、俺はミキに優しく提案する。
「青海に何を言われているかしらないけど、ふ、普段どおりにしていいよ」
「ボクは普段どおりのつもりですが……、この、ふひゃっ、い、いや、なんでもないです……」
ミキが話している途中に、青海が何かした。背中をつねったように俺は見えた。コイツ、ミキを誑かしているのか？
青海は目を逸らしながら口を開く。
「な、何でもないわよ。それよりも、どうよ？　この子。かわいいでしょ？」

ご、誤魔化したぞ！　その証拠に、青海は俺と目を合わせようとしない。
一体何を隠しているんだ？　俺はそれが気になってしょうがない。この口ぶりだと、青海からそれが出てくることはありえない。ミキにも細心の注意を払っているだろう。つまり、俺はここからどんな秘密があるのか会話しながら、かつ妹になってもらうというウルトラCをやらなくちゃいけないのか。
そして、会話の内容を考えなくては。妹になってもらうアプローチをするような。
悩んでいる俺を見た青海は、艶妖な笑みを浮かべながら静かに口を開いた。
「ミッキーは、この男のことどう思う？」
ちょ、直接的すぎる！　まだ、会って一分も立ってないんだぞ？
第一印象で、その後の未来が決定してしまうなんて酷過ぎる。ここは、ゆっくりと俺の凄さをアピールすることが先決だろ……。しかも、ミッキーだと？　ミキだからミッキー……。某ネズミのことを配慮していないとは、あだ名は中学生時代から進歩していないな、青海。
俺は、狼狽しながらもミキの反応が気になる。
ミキは、困惑しながら言った。
「よく分からないですけど、いい人じゃないと思います」
俺はその一言を待っていた。好印象っ！　俺は、外に出さないように必死で手を抑えながら心のなかでガッツポーズをとった。
第一段階クリアってところか。
しかしぬか喜びする俺ではない。以前までの俺なら、「じゃあ、俺の妹になってくれ」と言っていただろう。
春休みに身にしみた、嘘を警戒するスキルが役に立つというものだ。
こんなものでこの美女木正邦を騙すなど、甘いわ！　青海よ。
「よかった、き、君に頼みたいことがあるのだが、良いだろうか？」

か、固かったか？　だが、他に手はないだろう。ベストじゃないがベターな手だ。
「ええ、川口せんぱいからお話聞いています。ボクみたいなのでよければ、いつでも協力します」
な、なんだと……。早過ぎるぞ、展開が。あと何ページあると思ってるんだ。ここで、俺が話を切り出せば念願の夢がかなうというのか？
話が巧すぎる。今日の昼連絡して、放課後に妹になるってどういうカラクリなんだ？
さっきのなにか隠している雰囲気といい、いきなり妹になってほしいと切り出すわけにはいかないな。
「……」俺が語りかけられずにいると、辺り一帯を気まずい沈黙が支配した。四月の放課後は、冷えるどころかホンワカとしており、雲ひとつない空と散ってしまった桜の木が、窓によって切り取られている。
この沈黙に耐えられなくなった青海が口を開いた。
「で、ジョギーはこの展開に不満なの？」
いや、不満ではない。むしろ願ったりかなったり過ぎて怖いだけだ。だが、青海がなにか隠しているという不安要素が存在している限り、手放しでで喜んでいいものなのか？
「なにか隠してるだろう？」
埒があかなくなった俺は、ストレートに訊いた。
すると、ミキが不安そうにチラッと青海の方に目を配らせる。青海はアイコンタクトを済ませ、悪びれる表情を一切見せずに言った。
「なんにも隠してないわよ？　引っ込み思案だけど料理上手で気配りができる子って言ったでしょ？　ミッキーも一人っ子だったから、実兄はいないし」
「そ、そうだな」
「料理を作ればいいんですか？　じゃあ、……えっと……」
「ああ、コイツの名前は美女木正邦、変な名前だから『お兄ちゃん』

って呼んであげて。変な意味はないらしいわよ。少なくとも本人には」
「え、あ、あ、じゃ、じゃあ、に、兄さん」
「に、兄さん？」
兄さんだと？　兄さんと言った瞬間にパアッと表情が明るくなったミキ……。緊張もほぐれてきているみたいだし、よいではないか。
「ボクも、兄さんみたいな兄が欲しいと思っていたんですぅ」
なんという急展開。もう、ゴールしてもいいんじゃないか？
しかし、まだ妹確定ではない。まだ、お料理上手という設定が残っている。俺は自分で見たものしか信じないからな。
「……そういえばミキは料理が上手いという話を聞いていたのだが」
「え、あ、はい」
「そういうと思って、もうすでに用意してるわ。理科室にね」
青海は、カギをくるくる回しながら見せつけている。ジャーンとでも言っとくか？
「理科室？」
「ま、いろいろあるけど、フツーに料理できるから」
「まあ、確かに他に料理できるところないから行くしかないか」
ウチの高校は家庭科室がないし、料理ができるところを用意するとは用意周到だな。
「材料も恐らく準備済だから、早く行こ？」
流石は、旧町長の娘。権力は失っても、まだまだウラの繋がりがあるのか。この学校私立だしな。地主六家……。俺の野望に影響しなければいいがな。
万全の体制に若干の畏怖を覚えつつ、俺とミキは席を立った。
先頭の青海から某有名ＲＰＧ的に、ミキ、俺の順に並んでいる。黙ってついて行っているだけものすごい気まずい。
あまりに気まずいのはさすがに不味いと判断、ミキに話しかけるか。
「今日はどんな料理をつくるんだ？」

「材料を川口せんぱいに聞いてないんですけど」
「あー、多分野菜炒めぐらいなら作れるんじゃないかな？　よくわかんないケド」
階段を登りながら青海はちらっとこちらを見る。
「得意なのか？」
「あ……、作れますよ……ふひゃっ」
考えに集中していたのかミキは階段で蹌踉けた……というより転けたという描写のほうが正しいだろう。ドシャッという擬音が似合いそうな見事な（？）ヘッドスライディング。
しかも、腕をピンと伸ばしている体勢のまま一秒ぐらい動かないなんて、二十一世紀にはあるまじきズッコケっぷりを発揮した。
ドジッ子なのか？　そんな情報はこちらには入ってないぞ。
転けた瞬間、パンツが見えそうになった。妹候補とはいえ、俺は女の子のパンツを凝視するほど変態紳士ではない。いや、妹候補だからこそパンツを見るべきではないだろう。実際は、スカート丈がちょっと長かったので見ようとしても見れなかったというのが正しいだろうが。
「大丈夫か？」
俺は回りこみ、紳士的にミキに手を差し伸べた。
「へ、平気れす」
鼻を抑えながら強がってるミキもときめいてしまうほど愛らしい。
「強がるのはよくない。保健室行くぞ」
「だ、大丈夫です。いつものことなんで」
「そこまでいうのなら……」
俺は妹を大事にする派ではあるが、本人が頑なに拒むものを無理やり連れていったりはしない。
「ミッキーは中学のころからかわってないねー」
「にしても、中学時代バスケ部だったんだろ？　こんなところで躓くようでは、下手くそなんじゃないか？」
「うぅ、その通りです。ずっとやってきたのに、三年の時に一年生

にも勝てないぐらい下手くそでした……。体力もないし、運動神経も良くないですし……」
自信なさ気に下を向くミキ。弱々しさがかなり妹っぽいのだが、こんなことで本当に体育会系の部活をやれたのか？
「まさか、青海。ミキをいじめてたんじゃないのか？」
俺は、妹（仮）を愚弄しそうな青海を睨みつけた。
「そんなことないわよ、あんまり関わってなかったし」
「部活の後にちょっと……あ、いや、なんでもないです。さあ、行きましょう、兄さん」
「……ああ」
部活の後になんなんだ？　ものすごく気になる。百合か？　百合展開なのか？？　いや、妹に欲情とかはしてないぞ、断じて。兄（仮）として、気になるだけだ。
しかし、ここは下手に突っ込むとミキの心を傷つけてしまう。落ち着け、俺。
「ま、まあ、気を付けろよ。学校だから良かったものの、道端だったら交通事故の可能性も出てくるからな」
「わかっています、兄さん……兄さん……兄さんっていい言葉ですね」
なにこれ、もう完璧すぎる……。こんなんだったら、こっちが照れてしまう……。
「よせよ、ミキ。恥ずかしいだろ……」
「ご、ごめんなさい」
「アンタたち何してんの？」
「兄妹ごっこに決まってるだろ」
「あー、そー……」
青海の無愛想なツッコミに多少理性を取り戻した俺は、ふと気になったことをミキにぶつけた。
「そういえば、俺のような人間に、なぜ『兄さん』と慕ってくれるんだ？」

ストレートなようで、変化球のような質問に、ミキは即答した。
「センバーンっていうアニメに出てくる、鋳造兄さんに似てるからですよ」
「ぬ……」
セ、センバーン……。二年ぐらい前に流行ったロボットアニメ。ファンの九割が男で、残り一割の女子のほとんどが腐女子――男性同士のカップリングを考える脳内の腐った女子だったはず……。
中学時代、唯一俺に告白してきた同級生も腐女子だったな。『鋳込鋳造』に似ている俺と怪しげなカップリングをしていたので振ったのだが。
ち、チクショウ、掛け算のもう一人誰だ？　イケメンの『油目ヤスリ』か？　いぶし銀の『座金ジグ』なのか？　軽薄な『特機フライス』だけは嫌だ。いや、腐女子全体が嫌だけど。
「腐女子……なのか？」
「へぅ？　腐女子じゃないですぅ。ボクは、純粋に『センバーン』が好きなんですぅ。『スクロールチャック・ツール・イン！』なんてカッコイイじゃないですか？」
唐突に、センバーンの変身ポーズをとるミキ……。今までのドジッ子が嘘のように語る姿は何故か自信に満ち溢れていた。口調も今までよりもイキイキしている気がする。
「そ、そうだな……」
こんなにアツい子だったとは……。腐女子じゃないだけマシだが、なにか釈然としない気持ちが生じてしまった。
「そんなことより、着いたわよ、理科室」
鍵穴にカギを挿し、当たり前のように開ける青海。教師を騙して部活をつくろうとしていた俺が言うのも何だが、少しは悪びれながら開けろよ。どうせパクッてきたんだろそのカギ。
理科室は、意外とアット・ホームな雰囲気だった。たしか、去年までは殺伐とした中で怪しげな物質が跋扈していたはずだ。しかし、今は怪しげな物質は奥の棚に押し込められており、可愛いぬいぐる

みや薄型テレビ、ノートパソコンなどが置かれており、理科室というよりも居住スペースのように見える。
「この教室、何でこんなに可愛いんだ？」
「まーまー、気にしない。そこの冷蔵庫にある材料適当に使っちゃっていいから、あと、冷蔵庫に冷凍ごはん入ってるから、レンジで温めて、食器は……」
青海はテキパキと指示を出していく。ミキは、それを一つ一つ確認してエプロンを付けだした。もちろん制服の上からな。変な誤解を生まないように。ってか、何でエプロンや調理器具なんてあるんだ？流石になにか超越しすぎているだろ。ここは青海の部屋か？
珍しい理科室を見回していると、理科室にあってはならないものを発見した。
それは、ふっかふかの布団である。
コレって……、ミキと一緒に寝ろっていう青海からの思し召しか？
「兄さん……あったかい……」とかミキに言われたら、照れるとかそう言う前に、俺の心臓が持たん。というか、想像しただけで顔が真っ赤になってしまったではないか。
「青海、ちょっとこれは……色々段階って言うものがだな……」
「え？　あ、そこの布団ね」
「いや、俺も健全な男子高校生だ。だが、お、俺は妹に手を出すような……」
「何で顔真っ赤になってんの？」
確かに、俺は耳まで真っ赤になっている。しかし、しかしだな、青海……。
チーン。終わった、レンジで温めてた時間がね。
「なるほどねー、そういう意味じゃないよ」
あーそうか、じゃあしょうがないな。うん、気分が落ち着いてきた。野菜を勢い良く炒めている音が響き渡り、香ばしい匂いが立ち込めてくる。
うん、さっきまでの話は忘れよう。ミキの作っている料理は香ば

しいのに、あの布団に触れてしまったら危ない香りがするに違いない。
布団など無かった。最初っから。よし。
「ここは、わたしの友達が住んでるんだよ」
住んでるのか……。理科室だよ？　絶対そんなことありえないと思うけど、もうそれでいいや。
半ば諦めていた俺に、青海は念を押すように言い訳を口にする。
「ホントだって。スミ姉……、今年新しくここの先生になった藤岡スミっていう人が住んでるんだよ、そこの封筒にも書いてあるけど」
教卓の上に置いてあった封筒には、確かに、『私立来迎寺学園高等部第二理科室　藤岡スミ』と書いてある。しかも、年金関連の書類。流石の青海でも市役所から発行されているものを偽造なんてしないだろうし、信用のおける証拠だ。
冷静さを取り戻した俺は、ふと、ミキの方を見てみると、手際よく料理を続けている。その目は真剣そのもので、さっきまでのドジっ子が嘘のようだ。
やっぱりメリハリが大事だよな。ドジだけだったらウザいだけだし、ひとつ得意なものが持ってるからこそドジが光るってもんだ。
普通妹が料理をしていたらテレビでも観るものだが、生憎ここは居住スペースがあるとはいえ、理科室だ。テレビはあるにはあるのだが、アンテナなんて繋がっているわけないだろうし、教材の胡散臭い実験ビデオなんて見ようとも思わない。
仕方ないので、ミキの昔の写真などを見せてもらうか、青海よ。
「昔の写真はアレ一枚だよ」
「何だと？　お前、同じバスケ部だったんなら合宿風景とか、大会の写真とか色々あるだろ？」
どこに目を付けてたんだよタコ助とまで言ってやりたかったが、ミキを紹介してくれた恩もあるし、この程度でとどめておこう。
「あー、普通そうだよねー。どうしてないんだろうね？」
「ね？　って俺に振るな！　お前のことだろうが！」

「暇ならミッキーの後ろ姿でも見てればいいじゃん。そう言うのが好きなんでしょ？」
話を逸らしたッ！　たしかに、後ろ姿を見ているだけで十分なのだが、青海に言われると何か悔しい。
「まあ……、な」
俺も料理をするが、その俺が見てもミキは手際が良いように感じる。大きめの中華鍋を見事に振るところは少し俺の妹感とはかけ離れているが、そんなもんだろう。まさに半径八十五センチはこの手の届く距離ということか。
ちなみに俺の妹感では、大きい鍋は重くて振れず、「ごめんおにいちゃん。手伝って」なんて言ってくれる妹がベストだ。ミキは意外と体力あるな。普通の女子なら振るどころか持つこともできないところだろう。
豆板醤（だと思う）で味付けをしているところなど、俺の中の妹感を少し改める必要があるような気持ちにさせられる。というか、チャイナドレスを……。いや、やめておこう。ミキのスラっとした体格なら、似合いすぎてもはや妹とは呼べない、神の彫像物になってしまうからだ。
俺が見えないものと戦っている間にも、ミキは大皿に野菜炒め（青椒肉絲っぽい）を盛り付け、解凍したご飯と、いつの間に作ったコンソメスープをよそっている。
なんという気の使い方だ。おかずをもう一品とは。
エプロンを外し、お盆にご飯、スープ、野菜炒めを載せ、ひとりずつ配っていく。
一見危なっかしく料理を運んでいるように見えるが、かえって特殊なバランスを生み出しているのか、配るスピードは意外と早い。手慣れているふうにも見える。
「に、兄さんもどうぞ」
「あ、ああ」
俺の前に料理を置いてくれる。理想の胸に俺は少しドキッとして

しまう。全く発達していない、ボクはこれからですぅという気持ちが伝わってくるような胸だ。
「早く食べようよ……」
青海、俺がミキの胸に見とれていた事に気付いたのか？　俺はドキドキしている鼓動を無理やり押さえて食事にありつくことにした。
「ああそうだな」
「いただきます」
野菜炒め自体は、しっかりと火が通っており、塩加減もばっちりで定食屋並のクオリティである。
生まれた時から金持ちの青海は別として、ミキもお行儀のよい食べ方をしており、カチャカチャと食器が奏でるハーモニーとともにゆっくりと食事を口に運ぶ。
食事中にペチャクチャしゃべるのが嫌いな俺の理想型だ。
これまでの行動からすると、ミキは理想の妹に一番近い存在であると確信しているが、何か少し引っかかる。
青海の方をチラッと見ると、また目を逸らした。ミキは、相変わらず食べるのが遅いのか、こちらを見ていない。
テレビやコンポなど音を垂れ流す機器がないので、沈黙があたりを支配する。
俺は謎を解明したが、ミキが食い終わるのを待つ。
「「ご馳走様でした」」
「お粗末様でした。じゃあ、ボク後片付けしますね」
「お願いね、ミッキー」
「いや、俺も手伝おう」
このままミキに仕事を任せてのんびりしてもいいのだが、理想の妹には理想の兄がいなければならないだろう。理想の兄は、妹だけに仕事をさせたりはしない。
「はいっ、兄さん」
笑うと、八重歯が見えて可愛らしいというか、やっぱり妹らしい。
後片付けと言っても、食器と大きめの中華鍋ぐらいなのでそんな

に時間もかからないだろうし。
ミキは、片付けスキルも高く、スポンジに洗剤を染み込ませて、一気に磨いていく。俺も負けじと洗剤を洗い流す。協調作業でもミキは俺と息ピッタリ。まるで、昔から兄妹だったようだ。
順調に洗い物処理している途中に、目を瞬かせながらこっちを見ているではないか。
どうすればいいんだ、この状況。さっぱりわからん。どうしたの？　って訊くのは無粋な気もするし……。
仕方ないので俺もミキを見つめ返すと、ミキの方から告げてきた。
「コ、コンタクトが……」
あーそう言うことね。瞬きの理由。
「っていうか、目が悪かったんだ？」
「ハイ。昔は、メガネかけてました」
俺は、妹好きではあるが、メガネはそう好きでもない……。メガネ姿……。チクショウ、可愛いじゃないか。妄想だけど。
「と、とりあえず後は俺がやっておくから、手を洗って目薬でもさしてきて」
「で、でも……」
「いいから、俺にまかせろ！」
俺ができる最大限の笑みをミキに向ける。
「スミマセン、兄さん」
ミキは、手を洗ってポケットの中をまさぐっている。
でも、なんでメガネかけないんだ？　あ、ああ、某有名メガネメーカーと名前が被るからか。流石に親戚縁者でもないのにそういう風にいじられたら、ミキの性格上嫌だろうからな。
親戚縁者……？　まさか、ミキって苗字……？
は、恥ずかしっ。今まで下の名前かと思って呼んでいたのに……。妹を苗字で呼ぶ奴なんて世界広しといえども俺だけだろう……。だが、まだミキが名前である可能性はフィフティーフィフティー。
チラッとミキを見る……。さすがにアイコンタクトで通じないか

……。頭に疑問符が浮かんでいるようだ。というか、目薬そろそろさせよ。
「目薬、忘れてきちゃったとかか？」
「え、あっ……、はい……。コンタクト外したんで、大丈夫です」
なんというドジっ子根性。必需品を忘れてきて今日は大丈夫だったのか？　……関係ないけど、目薬を挿している女の子は好きだし、コンタクト外してる女の子も同様だ。ワンデータイプのようで、外したコンタクトは生ごみと一緒に捨てている。
そんなことより、俺はミキが苗字なのかどうなのかを知りたい。苗字であってほしくない。
「ミキって、苗字なのか？」
「え、いや、……」
「ミッキーの苗字は武雄だよー」
なんで青海が答えるんだよ！　俺とミキとのスウィートタイムだったじゃないか……。まあ、ミキが名前だということで安心はしたが。
それにしても、猛々しい名前だな。だから言いたくなかったのか……。いや、俺に言いたくなかったのは別の理由（、、、、）かな？
青海の言ってることは、チグハグだ。そして、ミキはシドロモドロ過ぎる。今の回答なんて、それの最たるものじゃないか。
俺達が食器の後片付けを終えると、青海はビーカーにいれた水をアルコールランプで温めていた。なんて理科の実験っぽいんだ……。と思っていたら、ここは理科室だった。あまりに居住スペース過ぎて忘れてた。ティーセットまで用意している。なんと用意周到。
「準備がいいな」
「ジョギーの考えてることぐらいわかってるって」
わずか一年程しか交友が無いにもかかわらずここまでやるとは、青海もなかなかだな。
「ミッキーもおいで？　一緒にお茶でもしない？」
「はいっ、すぐ行きます」

慌てて青海のもとへ急行するミキに危険を感じた俺は、そっとミキの方に近づいた。
「……へぅ」
想像通り、ミキは勢い良く躓く。俺は転けそうになるミキに手を差し伸べ、よろめきながらも転倒を防いだ。理想の兄（自称）としては、当然の働きだろ？
ドジッ子を助ける俺……、やっぱやめとこ。
「ミッキーは相変わらずドジだなー」
「す、すいません……」
「まあ、茶でも飲んで落ち着け」
「ありがとう、兄さん」
紅茶を飲むのも一服というのかどうかはわからないが、喉を潤すと一息はついた。
紅茶を飲んでいる青海の姿からは、金持ちの気品が漂うのが逆にイラッとしてくる。駄目だ。ミキを見てみろ、ミキを。猫舌で、うまく飲めないとか、どんだけ父性本能擽るんだよ。俺も猫舌だけど、ふーふーし辛いじゃないか。
「ふぅー、ふぅー……冷めない」
少し困っている顔もイイ！
「青海、もっと温いやつ出せばよかったじゃないか？」
「温いの？　逆、逆。熱いお湯じゃないと紅茶は美味しくないの」
「そうなんだが……」
「今度から日本茶用意しとくね。日本茶なら、少し冷めてても美味しいから」
青海はどうでもいい解説をしているが、俺は『逆』という言葉が引っかかっていた。
逆、逆……。確かに、『逆』だったら今までのモヤモヤ全てに合点が行く。
だが、だが……。違和感はすべて解消されるが、納得できないことがひとつある。

「こんなに可愛い子が、こんなに可愛い子が男の子（、、、）なわけない！」
混乱しながらミキを見るとミキはオロオロしながら青海の方を見ている。……ま、まさか？
俺の危惧していた事象が現実のものになろうとは。
「え、いや、あの……」
回答に窮するミキ。やっぱりそうなのか？　ミキの気持ちを知るため俺はあえて遠回りな質問をぶつけてみた。
「じゃあミキ。その制服、どこで着替えた？」
「……」
黙りこくってしまったミキ。青海に助けをもとめている視線を出しているミキに代わり、青海が答える。
「服って制服でしょ？　普通に家から着てきたに決まってるでしょ？」
「その服が、ミキの服であることはあり得ない。それは恐らく保健室の備品かなんかだろう？」
「しょ、証拠はどこにあるのよ？」
証拠という言葉が出た時点で、否定しているようなもんだろ……。
「スカーフの色だ」
「スカーフ？　今年の一年は赤でしょ？」
「そこじゃない、入学して一ヶ月も経っていないのに、色褪せているのはそれがミキのものではない証拠だ」
「お、お下がりの場合もあるじゃない？」
「ミキは一人っ子だし、旧住民と仲が悪い新住民にそんなツテなどあるはずがない。俺を三十分ぐらい待たせたのも、ミキが『着替える』必要があったからだ。ドライアイなのに目薬を忘れたり、いくらドジッ子でも少しおかしいしな」
純粋に驚いているミキに対して、青海は名前のとおり海のように真っ青な顔だ。
「いや、ミキはそのへんの女の子より可愛い。俺もさっきまで女の

子だと思っていたからな」
「じゃあ、何で男だと思ったの？」
「思った、じゃない。実際のことだ。じゃあ訊くが、何で中学時代の写真が男女混合の一枚しかないんだ？」
「それは……」
青海は口ごもる。俺は畳み掛けるように攻勢を仕掛ける。
「ミキが女子バスケ部員ではなく、男子バスケ部員だったからだ。女子バスケ部員だった青海が、男子バスケ部と写る機会なんてあまりないだろうからな」
「たまたま一枚しかなかっただけで……」
あくまでもシラを切ろうとする青海。もう、青海もヤケクソなんだろうな。バレてもデメリットがあるわけでもないし。
「ミキはどうなんだ？　性別的には男なんだろ？」
俺は最終判断をミキに委ねることにした。ここまでは事実だが、この先は俺にもわからない。デリケートな精神の病気かもしれないし、ただ単に青海に命令されただけかもしれない。
するとミキは、涙混じりにゆっくりと言葉を紡ぎ出した。強く、しっかりとした声で。
「ボクはずっと女の子に間違えられてきてました。制服を買いに行っても、店員さんに女の子用を持ってこられるし、学生服着てたらコスプレと勘違いされたりしました。今回も、川口せんぱいに頼まれて仕方なく女の子役をやりましたけど、ボクは……、ボクは男なんですぅ。中学生の頃もクラスメイトに女じゃないのかとバカにされてきましたけど、男なんですぅ。こんな格好のボクを男だと見破ってくれて、すごくうれ……しかったです。ボクは、妹になれないけど、それでもボクは、兄さんと呼んでいいですか？」
「……お前の気持ちはよくわかった。好きにしろ」
「はい、兄さん」
一連の会話を黙って聞いていた青海は、あくまでも推理小説の真犯人ごっこ遊びの途中らしく、高笑いをしながら台詞を口にする。

「ふふふっ、よくわかったわね。ミッキーが女子の制服を着てる状態で見破ったのは、ジョギーが初めてよ」
「男と女が区別できない人間に、妹を思い遣る資格などないからな。ミキもこんな茶番に付きあわせて済まなかった。それと、青海。何でこんなことをしたんだ？」
「それは……。わたしは、ジョギーに……なんでもない」
ようやく真犯人ごっこをやめたのか、素の表情になっているようだ。
「兄と妹というのは、お互いを信頼し、何でも言い合える存在なんだ。少なくとも俺はそう思っている。こんな大事なことを隠すような妹なら、俺は妹より、正直に話してくれたミキのほうがいい」
「に、兄さん……」
ミキが男であると分かっていても、この潤んだ瞳の前には何も役に立たないだろう。秋葉原の妹喫茶にいた義妹（いもうと）以上に義妹らしいミキの姿に、俺は付け加える言葉がなかった。
「でもわたし、ジョギーのこと、少し見直しちゃったな……その……」
「え？　何だ？」
よく聞こえん。顔真っ赤にする前に、はっきり喋りやがれ。
「……バカ！　なんでもないわよ」
「バカとはなんだ、バカとは。この天才に向かって」
全く、バカはお前だろう。こんな薄っぺらい計画で俺を騙そうとするなんて。騙されかけてた俺が言うのも何だが。
「はー、尊敬して損したー。帰ろ？　ミッキー」
「へぅ？　まだ、片付けが終わってないんですけど」
「片付けはジョギーに任せて、アンタは着替えなくちゃいけないでしょ？」
青海はズンズンと音を立てながらミキを引っ張っていく。
「ちょっと痛いです川口せんぱい。やめてください」
「いいから！　じゃあ、お願いね、美女木正邦君」

キツイ口調で俺を捲し立てる青海。俺、なんか悪いことしたか？
「やめてやれよ、ってか俺なにかしたか？」
「それ片付けるまで教室に入ってこないで。授業料免除取り消しにするわよ？」
ひっでー女だ。俺の生命線を人質にとるなんて。それをされたら、私立の馬鹿高い授業料なんて払えっこないだろ？
遠ざかる青海を尻目に、俺は為す術も無く片付けにとりかかった。
綺麗に片付け終わって荷物を持って一年七組へ駆けつけると、ミキも青海も姿が見えない。七組の生徒に訊いてみると、どうやら先に帰ったらしい。
「……よくわからん奴だな」
俺は呟くと、帰路へと着いた。女心と秋の空と言うが、秋の空レベルの現象じゃない。
明日こそ、理想の妹に出会えますように。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9440y/

---

妹部をつくろう

2011年11月28日03時49分発行